



途上国の現場から、そして研修の現場から

ミャンマー、スリランカ、バングラデシュの3ヵ国を対象に地域別研修「農民参加型用水管理システム」コースを実施している大雪土地改良区と富良野土地改良区、北海道開発局の方々が、2007年1月の約2週間にわたり、ミャンマーとスリランカを訪問しました。北海道で学んだ研修内容がどのように活かされているかを確認するために、そして実際の途上国の用水管理の現状をより深く理解し、来年度以降の研修にフィードバックするための訪問でした。ここでは現地を訪問した3名の方々に話を聞きました。

「北海道で研修を受けた方の担当エリアでは水管理ローテーションが確立されました(ミャンマー)。農民組織の代表者同士が、研修員の指導のもとミーティングを行い、水路への配分調整を行っているのです。北海道で学んだことを、できる部分から着実に実行している様に敬意を表します。農業技術の向上、良品質米をつくる気持ちは、国は違っても同じということがよく分りました」

(大雪土地改良区 亀割俊之)

「日本ではおとなしい印象だった方も、自分の国(スリランカ)では活発に活動していました。『農家と語り合う姿勢の大切さ、会計の透明性の重要性を北海道で学んだ』という帰国研修員。自身の担当地域で、農民とのミーティングを何度も開催し、賦課金徴収率を向上させ、水路浚渫を行う等、維持管理を充実させていました。ミャンマーでもスリランカでも帰国した研修員は非常にあたたかく我々を迎えてくれ、「心から話せば意味は通じる同じ仲間なんだ」ということを実感できました」

(富良野土地改良区 山田一志)

「ミャンマーではこれまでの研修員全員が空港まで迎えにきていた。その中の2人は長距離バスで12時間以上もかけてきていた。また、訪問した先々で帰国研修員はもちろんこと、その家族や配属先からも暖かいもてなしを受けた。そして、多くの帰国研修員は北海道で学んだことをできることから着実に実施していた。これらの姿を見て、『いい作物を作りたい』この農家の気持ちは全世界共通である。そして農家を助ける仕事をしているものも同じ気持ちを持っている』ということを再確認することができた」

(北海道開発局 福島健司)



ミャンマー 帰国研修員とともに農家へのヒアリングを行う。



スリランカ 北海道での研修の成果をどのように活用しているのか発表する研修員



開発教育の現場から、そして開発途上国の現場から

道内の国際理解教育や開発教育に熱心に取り組んでいる学校の先生方が実際に開発途上国を訪問し、開発途上国の置かれている現状や日本との関係、国際協力に対する理解を深めていただく、教師海外研修。この1月に道内の先生方8名と北海道教育庁の職員1名等がベトナムを訪問した。この研修に参加した橋詰教諭(石狩市立厚田中学校)にベトナムで感じたこと、今後の取り組みに向けた抱負などを聞きました。

既にベトナムでの経験を子供たちに伝えているが、子供たちの反応が違う。実際の経験に基づく話は、文字とか映像等で得た知識を伝えるのと違って、子供たちの心にダイレクトに響いている。

日越貿易センターで日本語を学ぶベトナムの生徒たちを相手に「外国人の驚く日本のもの」と題し、授業を行ったが、非常に素直に受け止めてくれていた。ベトナムの学生は日本への関心が高く、日本の社会問題についての知識も多かった。グループディスカッションの時に、学生から日本のいじめについて「ベトナムでは家族の絆が強く一人で孤立することはない。いじめによる自殺等は考えられない」との発言があった。この話を聞いた後、ベトナムの街中を滑走するバイクを見る目が変わった。バイクに2人乗り、あるいは3人乗りする姿はこの家族の絆の表れなのではないかと。親子の心が離れていたらあのようには乗れないであろう。

バクザン省のニンソン小学校の訪問も強く印象に残っている。現地で活動する青年海外協力隊もびっくりするほどの歓迎振りであった。このような現地の方々との交流とともに、青年海外協力隊やJICA関係者との交流も強く印象に残っている。1日、あるいは2日間の長さであったのに、これからもつながっていく、という気持ちを持たせてくれている。

これから学校現場で実践するときには、成長や格差といったベトナムの問題はもちろんのこと、このような現地の人々や国際協力に関わる人たちの話を子供たちに伝えていきたい。



ニンソン小学校での授業を見学する先生方



札幌出身の小野寺隊員の話を聞く先生方



ベトナムのバイク。家族の絆が感じられます